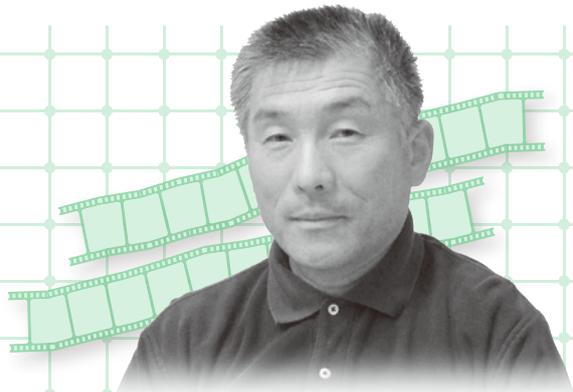


# こうほう ショッキング

Vol.63

Kōhō shocking



えとう ゆきはる  
江藤幸治さん

## ●プロフィール

57歳。上県町佐護出身、4歳の時比田勝に転居。上対馬高校卒業後、九州産業大学商学部に進学。卒業後福岡で就職するも、実家が経営する会社を手伝うため26歳で帰郷。10年前から新たに「有限会社ウッドテック」として出発。比田勝区長など地域のお世話役も務める一方、地元写真家としても活躍。対馬日韓交流写真協会、写真クラブ「写遊国境」に所属。母と妻、中学3年と小学6年の二人娘との5人暮らし。この日は、ご自身で撮影された作品が飾られたご自宅でお話を伺いました。

○写真との出会いから教えていただきましょうか。

僕が物心ついたころから実家にカメラがありましたから、どこの家にもあるものだと思っていました。撮ってみたいと思い始めたのは、小学校高学年のころから。高校では写真部に所属しました。でも、それ以降はこれといって撮るでもなく(笑)。再び写真に興味を持ち始めたのは、娘の誕生日がきっかけです。福岡でカメラのコーナーに行つてはあれこれ機種を手に取り、妻を拝み倒して(笑)カメラを購入。いかに娘をきれいに撮影するか、それが唯一の狙いでした。カメラへの興味も深まってきたころに写真クラブの前会長さんから声をかけられ、写真を通していろんな交流ができる楽しさに、ますますのめりこんでいったという感じです。

○どのように腕を磨きましたか？

もともと自然が好きでしたから、花を撮ることから始めました。露出や彩度を工夫したり、大写しや望遠を使ってみたり、花を下からのぞいてみたりもしましたね。ずいぶんとあれこれ工夫しているうちに、カメラを思うように操れるようになりました。現在主流のデジタルカメラ

らは、撮影した後でも修正などができますから気楽に始められますが、フィルムカメラ、とりわけ色調を補正するのが難しいポジフィルムを使って撮影する人としては、やはり作品の色彩が違つように思います。あとは、固体の特徴をつかんで被写体をどう撮るか、構図が大切ですね。

○一番感動した被写体は？

富士山ですね。夜明け前の暗い空から、日の出が近づくにつれて富士山が浮かび上がった、その素晴らしさといったらもう：否が応でも手をあわせていました。威圧感さえ感じましたね。

○写真を通じた思い出深い出来事を教えてください。

写真クラブの活動で、プサンの写真連盟の人と一緒に慶州の民族村へ撮影に行きました。おはあさんに撮影をお願いするとはじめは断られたのですが、頼んだらチマチョゴリに着替えてきてくれて。撮影中はやっぱり表情も硬かったのですが、僕は撮り終わって1〜2歩下がろうとした時の素の笑顔をパシャリと。県展も知らなかった僕に、良い写真だからと薦めてくださったその作品が、コンテストへの出展のきっかけになりました。その後、この写真を本人に渡し

たくて機会をうかがっていたのですが、やっと去年、10年ぶりに訪問することができたんです。モデルのおばあさんももう93歳になつていて、はじめ何のことやら分からないといった感じでしたが、写真を見て大騒ぎ(笑)。家族も呼び出して写真を囲み、若いころのおばあちゃんがいると泣き笑いの大喜びでした。

○被写体として韓国のどのようなところに惹かれますか？

建物などの形や色彩、でしょう。最近は近代化が進んでいますが、地方には韓国特有の風景が残つていて興味深いです。地元の人との交わりもあつて楽しいです。

○今の日韓の情勢についてどう思われますか？

政治レベルでぎくしゃくしている時期だからこそ民間レベルの交流はしていくべきだと思います。民族の違いはありますが、私たちは写真を通して雨森芳洲の「誠信の交わり」を思つて活動しています。

毎回、登場して下さった方に次の方をご紹介いたたくこのコーナー。次回は上対馬町比田勝にお住まいの今村純一さんです。お楽しみに。